紫式部における女性像

木戸幹夫

〔はじめに〕

紫式部日記の中に、同僚の女房たちが、式部に向かって、式部の人柄や外見を感想として語る部分がある。式部は、自身がすでに源氏物語の作者として世間周知であり、宮仕えに出てからは、とかく注目される人間であることを自覚していたということもあって、この女房たちの、自分に対する感想を包みかくさず記している。

「かうは推しはからざりき。いと艶にはづかしく、人に見えにくげに、そばそばしきさまして、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさむものとなむ、みな人いひ思ひつつにくみしを、見るにはあやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる。」とぞ、みないひ侍るに、恥づかしく、人にかうおいらけものと見おとされにけるとは思ひ侍れど、ただ、これぞわが心とならひもてなし侍る。（日記）

女房たちのことばは辛辣である。かぎ括弧の部分がそれで、式部に出会うまでと、出会ってのちのことが言われている。出会うまでは、取っつきにくく、人を小ばかにしたような顔つきで、何かというと歌を多くつくってよそよそしい様子の人だと聞いていたというのである。それが実際に会ってみると噂とはちがって、おっとりした人柄なので別人かと思うとつけ加えている。

これに対して式部は、おっとりした人間だというように見くだされていたとは知っていたが、これこそ、長らくわざとにふるまってきた私の外見だというふうに、説明を加えている。

この記述を見ると、紫式部は、勝気で、自尊の強い、何か身構えたところのある人物のように思われてくる。

しかし、実際はどうであろうか。あの源氏物語という大河小説を、世界の文学史においても初めての偉業と称えられる形において完成した作者にしては、いくらか小さく見える記述である。

しかも式部は女性であった。既に母系性の実質的な内容を失って、男性本位の生活慣習に満ちた社会となっていた平安時代という時点で、式部はいかにして女性たり得ていたのだろうか。また、女性をいかに見たのであろうか。

本稿では、第一章で源氏物語から理念としての女性を見、第二章で紫式部日記における女性の実際を見ようとした。

第一章　源氏物語に見える女性像

(1)　巻二「帚木」における理想像

——誠実で静かな性格

有名な「雨夜の品定め」の部分で、四人の若い男性が女性論を述べあっている。長雨で晴れ間なき頃、つれづれと降りくらし、物忌みのつづく宮中の宿直の宵であった。

この貴公子たちの中に若き源氏もいる。中でもこの座談のまとめ段階で、「左の馬の頭」が述べた女性像は、当時の平均的女性観というよりは、作者である紫式部の女性観と見るのが適当である。つまり、内容が総括的であり、観点も通時代的な客観性をもっているように感じられるからである。

今は、ただ、品にもよらじ、かたちをば、更にも言はじ。いと口惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくば、ただひとへに物まめやかに、静かな心のおもむきならんよるべをぞ、終の頼みどころには、思ひおくべかりける。（源氏物語）

自分の伴侶とする女性を選ぶとすれば、品つまり家柄か、容貌か、才能か、いずれに価値を置いてみるかという話の結論として述べられたものである。

品、つまり家柄の良さなどは捉えどころがない。昔栄えて今衰えている家もある。逆に成り上がりの家筋はどう考えようか。昔も今も栄える高貴な家柄は四人のうち源氏を除いてあとの三人には縁もない。また、容貌の美しさがあっても他の欠点がことさら目につくものである。そういう話の成り行きのあとに、右文のごとき結論が述べられることは極めて穏当であり、内容としても普遍性があろう。

「ひねくれているという評判もなく、実直で落着いた性質の人ならば、自分の頼れる者として、終生の伴侶としてよいだろう。」実に妥当な女性観と言える。ここでいう「頼みどころ」は本妻をさすのであって、役職について仕事のある男の世話をし、相談相手となり育児から家事万端を任せる妻を選ぶのである。であるが故に「今はただ品にもよらじ、かたちをば、更にも言はじ。」となるのである。

この「品にもよらじ」や「かたちをば更にも言はじ」ということが紫式部の身の上から付会されたと考えるのは不必要だ。なぜならば四人の話者が階層的に抜きん出ている人たちであって、紫式部は自らが受領階級の娘にすぎないことを十分承知だったからである。また、彼女の容貌もそれほど美しくはなかったようだが（日記）、ここで自らを物語中に投影させるよりは、作者の位置にとどまって、思うがままの小説的構築を遂げる方がより重要であった。

つまり、この「帚木」に見る女性像は、紫式部の女性観の一面を示しているといえる。即ち、素直で誠実さがあり、落着いた性格、言わば知情意を兼ねた利口な女性が理想だと述べ、いつの世にも通じる真実を示した。

(2) 「空蟬」に描く女の生き方

——自らを律する女

空蟬という女性は巻二「帚木」と巻十六「関屋」に登場している。夫のある身ではあったが、源氏から恋慕を受け、勿論、身の上を顧みつつ身を引いたのち、十二年して再会するという不思議な運命に描かれる。

問題は空蟬が源氏に求愛された初めから、十二年後の再会ののち、

夫の死を経てひっそり尼になるという終末に至るまで、彼女自身が身を処した女性としての聡明さと慎ましさの点にある。

そもそも、巻二において、源氏が方違えのために、突然、伊予介の邸を訪れることがあった。空蟬はこの伊予介の若い後妻であり、源氏はかねてからその噂を聞いていた。その夜、伊予介の邸は他にも客があって手狭であり、源氏と空蟬の寝所は近い距離にあって、空蟬やその女房たちの声は源氏の所まで洩れきこえたのであった。

空蟬の使う女房に「中将」と呼ばれる女性がいて、たまたま用事のあった空蟬がこの女性の名を呼んだところ、それを聞きつけて、源氏は、当時自分の官が中将であったのを口実に、空蟬の部屋に押し入ったのであった。空蟬は当然のことながら困惑し、源氏の強い求愛を拒んだ。その時の空蟬の言葉は印象的である。

「いとかく、うき身の程の定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、『あるまじき我だのみにて、見直し給ふ後瀬もや』とも、思ひ給へなぐさめましを。いとかう、仮なる浮寝の程を、思ひ侍るに、たぐひなく思ひ給へ惑はるるなり。よし今は『見き』となかけそ。」　（源氏物語）

と言うのである。未婚のままでこのように源氏の愛情を受けたのであれば、あるはずもないことを自惚れて、期待して、それでも将来には思い直されて情をかけてくださることがあろうかと、空頼みするのですが、その後瀬、将来は私にはありません、という言い方である。空蟬の懸命な物言いの中に、聡明さとそれに支えられた慎ましさが読みとれる。

前節で見た「利口な女性」の実例を、この空蟬の上に見るができると思われる。

なお、「今は『見き』となかけそ。」には、古今集の次の古歌が踏まえられている。

それをだに思ふこととて我が宿を見きとな言ひそ人の聞かくに
（古今集・巻一五恋、よみ人しらず）

ところで作者は空蟬を慎ましく聡明な女性としてのみ描いたのではない。また、当時の男女の因習として男性よりも閉ざされた世界で忍従の呪縛に耐え、突然の運命に翻弄される弱い存在の女性が懸命にそれに抗う美しさを描こうとしたのでもないであろう。

先に掲げた空蟬の言葉は実に陰翳に富んでいる。のちの、巻一六を読んだあとで、再度この巻六の部分を読み返すと、その陰翳は、空蟬自身に語らせてある伏線、つまり、物語の展開上の先触れとしての言葉からにじみ出ていることがわかる。

即ち、「あるまじき我だのみにて、見直し給ふ後瀬もや」と空蟬が仮想したことは、のちに実現の一歩前という状況にまで及ぶ。そのように見れば、「いとかく、うき身の程の、定まらぬ」と言い、同様に、「いとかう、仮なる浮寝の程」と語る空蟬自身の身の上に対する概嘆は、仏教的な規範を意識したものとはいえ、やはり彼女の人生的な伏線となっている。この仏教的無常観は重要である。

こののち十二年を経て二人は偶然に再会し源氏は空蟬に消息をお

くり、二人の絶えない因縁を伝え、このことがあって後、ほどなく空蟬の夫は死亡するのであるが、空蟬は、憂き世を思い知り、人には知らせず尼になってしまう。空蟬のこの剃髪は、一つには、夫の子の筋違いな懸想を避けるためであった。しかし、かつて源氏に告げた「見直し給ふ後瀬」が空蟬にめぐって来てもしかるべき時になって、空蟬の選んだ道は、男の愛に依存する世界ではなく、自らが自らを律する仏法の世界であった。

男の愛のはかなさをよく知ってそれに頼らず、自らを律してゆくことのできる女、そういう女性を紫式部は望ましい女性像の一つに数えていたと思われるのである。

(3) 紫上の述懐に見える女性の苦悩
——伸びやかに屈託なく生きたい

紫上は先帝の孫、藤壺の姪であって、朱雀院の女三の宮が源氏に嫁するまでは、長らく源氏の正妻の地位にあった。この物語における周知の女主人公である。

次は巻三九「夕霧」の一節である。ここで作者はこの紫上に注目すべき述懐をさせるのである。これにより、紫上自身の、自ら女性であることの意識、女というものの立場の苦悩が示されるが、これらを点検しつつ、女性一般の生きざまを考察してみることにする。

「女ばかり、身をもてなすさまも、所せう（窮屈で）、あはれなるべきものはなし。物のあはれ、をりをかしき事をも、見知らぬさまに引き入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは。おほかた物の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも（つまらぬ者としての暮らしに馴れつこになつて過ごしていくとするならば、その女性を）生ほし立てけむ親もいと口惜しかるべき物にはあらずや。心にのみこめて（女性のことを）無言太子とか（称して）、法師ばらの悲しき事にする、昔のたとひのやうに、あしき事、よき事を思ひ知りながら、埋もれなんもいふかひなし。（そうかと言って）わが心ながら、よき程には（自分の身を）いかで保つべき。」

（源氏物語）

紫上のこの述懐は、王朝時代の女性たちの一般的な生きざまを極めて端的に訴えている。男性中心の政治社会、男性本位の日常生活の中で、いかに賢明な女性が現われたとしてもそれなりの飛躍の場はなく、男性ほどに自由に振るまう慣習もなかった。

このようなことは、今日周知のことであるが、それが歴史家の探索によって判明したというのでなく、ここに見るように、源氏物語の一登場人物の一発言の形で直接に示されたことを銘記すべきである。この紫上の述懐は、当時の女性の生き方の暗い一面を示しているというべきである。

この紫上の発言は源氏との対話のつづきに為されている。源氏は、わが子夕霧の落着かない女性関係を心配し、相手の女性たちがそれぞれに気の毒だと同情したあと、もし自分が先立って、紫上を後に残すことになったら、紫上の身の上が案じられるという意味のことを話すのである。

こういう続きの中での紫上の発言であるから、紫上のこの嘆きは、単に一身を省みて言うのでなく、女性一般に及ぶものと言ってよいだろう。さらに、この述懐の後に、紫上のこの嘆きは、自分の養女の養育を案じてのことだと記述されるので、直接には養女が女性としてたどる道もまた、「窮屈に生き、言いたいことも心の中に押しこめ、言うかいなき者として暮らす」ことになりかねないと案ずるものなのである。

この述懐は、前述のとおり、当時の女性の生き方の暗い半面を示しているが、これを望ましい生き方を指向するものとして、あるべき生き方の形に言い替えると、次のようになるであろう。即ち、「伸びやかに屈託なく生きて、心に感ずることは率直に表に出し、教養をつけて、自分の身をよき程に保つて暮らす」という生き方である。作者の紫式部は、平安女性の生き方・あり方の一つの型を、このように規定していると思われる。

第二章　紫式部日記に見える女性群像

(1)　「斎院の中将の君」への憤慨

——自尊と社会的顧慮

紫式部日記に、消息文と言われる文章の部分があり、その中で、十六人の女性たちの人物評が為されているのは有名である。以下、それらを見ていくことにする。

まず、斎院付きの女房、「中将の君」であるが、

斎院に、中将の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。　（日記）

という書き出しで始まり、紫式部は実に長い文章を用いて、この人への不満や、この人の発言に対する弁明を書いている。他の女性たちへの批評に当てている字数は、大体、長くて二四〇字内外、（岩波書店刊・日本古典文学大系版による。句読点も字数に含む。）であるが、この中将の君に対しては、二八六〇字にものぼる字数を当てている。ふつうの人の数倍から二十倍にものぼる分量である。

事の発端は、右の引用文で見るとおり、式部の知人が他人宛の中将の君の手紙を、こっそり式部に見せたことにあった。

中将の君の手紙には、斎院方、つまり自分の仕え所の同僚や、主人の斎院のすぐれていることを自慢し、よその仕え所と、そこの人々をおとしめた内容だったのである。紫式部はそれを次のように言って憤慨している。

いとこそ艶に、われのみ世にはものゆえ知り、心深きたぐひはあらじ、すべて世の人は心も肝も無きやうに思ひて侍るべかめる。（中略）にくく思う給へられしか。

また、中将の君の手紙文の、直接の引用には次のようなのがある。式部も、他人の手紙の盗み見でもあり、「中将の君としては、気がねのない私信として書いているのではあるが。」と、一応ことわっておいて、

歌などのをかしからむは、わが院よりほかに誰か見しり給ふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひ出でば、わが院こそ御覧じ知

るべけれ。」などぞ侍る。　（日記）

という書きぶりである。誇り高い紫式部の心を揺すらずにはおかない筆致であると言えよう。これに対して、式部は次のように反論する。

げにことわりなれど、わがかたざまのことをさしも言はば、斎院より出できたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことに侍らず。ただいとをかしう、よしよししうはおはすべかめる所のやうなり。さぶらふ人をくらべていどまむには、この見給ふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを、つねに入りたちて見る人もなし。　（日記）

紫式部の言いぶんとしては、「中将が斎院方の風流気を自慢するほどには、すぐれた歌が出ませんね。また、仕えている女房を、お互いに比べて競争したとしても、斎院方が必ずしもすぐれているというわけでもないでしょう。」と皮肉たっぷりに述べている。

しかし、鋭い言葉で反論・批判するのはここまでで、以下では、或る場合は斎院方のすぐれている面に理解を示したり、或る場合は自分たち中宮方の必ずしもすぐれていない点について弁解したりしている。特に、中宮方の弁解には多くの言葉を費している。

斎院の中将が自慢している主な点は、斎院方が和歌の道においてすぐれているということである。これに対して、紫式部の仕える中宮方は、引っ込み思案の気まじめな人が多く、訪れてくる上達部たちに応対する必要があっても、子供のように恥じて、御簾の内側でおし黙ってしまう女房さえあったと言う。まして、和歌による応答も出来かねることがあったらしい。

気丈で勝気な紫式部が、自らこのように書くのだから、中宮方の和歌の方面のことは、一部の人を除いて、斎院の中将のあてこすりのとおりであって、幾分、見劣りのすることもあったのである。

問題はこれ以後にある。自尊心の強い式部が、中将の自慢、ひいては中宮方への誹謗に対して、筆鋒するどく反論を始めたあと、あまり字数を費やすことなく、大部分の文章を相手方への理解や、自分方の弁解に当てているのは何故であろうか。

一つは、相手方が天皇の即位と統治の宗教的な後だてとなる斎院という地位にかかわる人たちだからではなかろうか。このような重要な立場にあられる斎院方に対して、式部の遠慮が働いたと考えても不自然ではないだろう。

次には、そうはいっても、式部が反発している相手は斎院方ではなくて、中将個人なのだという意識もあり、きびしく反論を始めて言葉少なく終わるのでは、式部の憤慨や、自尊の治まりようがなかったと推測される。

このように、式部の自尊も、自らの社会的顧慮の前で鋒先を鈍らせることがあったのである。ただし、この中将の君に関する消息文の末尾では、

さりとて、わがかたの見どころあり、ほかの人は目も見しらじ、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞまたわりなき。　（日記）

と言ひ、「まずわれさかしに、人をなきにし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあらはるめれ。」と述べて、反発の鋒先を決して納めないのである。式部のこの自我の強さは、平素、表面をわざと「おいらけ者（おっとり者）」と振る舞う反動として、一層強いものになったと思われる。

従って、前述の、「社会的顧慮」は、単に斎院方に対する気がねとか遠慮という意味にとどまるものではないとも思われてくる。つまり、相手方を否定するのみでは功をおさめ得ない。自らの弱点も示し肯定して得られる客観性は、式部の発言の立場を強くするという効果を少なくとも期待できたであろう。そういう意味での社会的顧慮も、紫式部においてはあり得たと思われる。

(2) 清少納言への酷評
——才女への対抗意識

紫式部日記の消息文中、清少納言を評した一文は、その仮借なき痛罵とも言える酷評のために有名である。

清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書きちらして侍るほども、よく見ればいとたへぬことおほかり。かく人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍れば艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折も、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。（日記）

一読して好悪の感情をまる出しにした文章であることがわかる。この点から言えば、あるいは式部は、他人に対する認識に際して、かなり露骨に好き嫌いの感情を持ち得た人と思われる。この日記は、源氏物語を書き終えたあとか、少なくとも大部分が完成したあとに成ったと言われている。源氏物語を書きあげ、多数の人物と事件を造型した式部が、世に少なからぬ支持者のある清少納言の生き方を、その一面なりとも理解できないはずはないのである。

清少納言に対するこの嫌悪に似た感情を、よくある主家意識からくるライバル感情に由来するという説は当たらない。二人の宮仕えの時期が前後にずれているからである。

二人の主人は共に一条天皇の中宮であり、清少納言の主人は定子、式部の主人は彰子と言った。定子は兄の内大臣伊周の失脚で後見を失い、尼となって間もない長徳六年（一〇〇〇）死亡、清少も宮廷を去った。式部の主人の彰子は、長徳五年入内している。式部の宮仕えは寛弘二年（一〇〇五）の説が穏当とされ、式部にとって清少は、いわば先輩にあたる形になっている。

二人は才女として確かに宮廷での名声は競っただろう。しかし、清少の栄光は過ぎ去っていこうとしていた。しかも、主家の没落とともに清少も失意のうちに宮廷を離れたであろう。前述の引用文は、まさにそのような時期に書かれた。このことから考えると、紫式部はたとえ相手が衰えに向かう者であっても、ひとたび対抗意識をもった相手に対しては、これを鞭打つことをあえてするという、そういう性格をもっていたのだろうか。

おそらく、清少が才女であるがゆえに、式部のこれに対する批評

は嫌悪の気味をもつことになったと思われるのである。

(3) 同僚の才女「和泉式部」への褒貶
——仮借なき評家の立場

和泉式部の「文」や和歌に対しては、式部は一目置いていたらしいことが次の文章でわかる。しかし、一つ褒めては一つ貶すという形をくり返し、通算九項目の事柄の批評をする内で、褒めているのが四つ、貶しているのが五つという結果になっている。

和泉式部という人こそ、おもしろう書きかはしける。されど和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、その才ある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと。ものおぼえ、かたのことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ。〈以下略〉　（日記）

このあとは、「さらりとした歌に一点良い所があるが、それでも他人の歌の批評を見ると本当の歌の道はわかっていない。」そしてまた、「労せずして口から自然に出てくるような詠みぶりだ。」と言い、最後には、「恥づかしげの歌よみやとはおぼえず。」と冷淡に突き放してしまうのである。公開を予期した日記文としては実に大胆というべきである。和泉式部と紫式部とでは、紫式部の方が早く中宮彰子に仕え、和泉式部がおくれて宮仕えに出たころには、この日記は既に成立していたものと思われる。従ってこの文章には和泉に対する同僚意識はないかもしれないが、後日の添削はできたはずだ。

紫式部は自分とは尽く対照的な面を持つ和泉式部に対して、かなり異質なもの、異和の感覚を覚えたようである。「おもしろう書きかはしける。」も、素直にほめたのではなく、奔放な恋愛による男性遍歴における手紙の贈答を指した上の、皮肉な評価なのかもしれない。「和泉はけしからぬかたこそあれ。」がこのことを述べていると思われる。即ち、橘道貞、為尊親王、敦道親王と次々に男性を遍歴しているのがそれであろう。前章で述べたごとく、自ら律する生き方を求め、現世の無常を知る紫式部にあって、和泉式部の生き方は、まことに「けしからぬ方」なのであり、認めがたいものであったはずである。

しかしながら、和泉式部の才能が並々でないことは事実であり、「口にまかせたる言ども（ことば）に、かならずをかしき一ふしの、目にとまるよみそへ侍り。」と褒めるのである。

このようにして結局は冷淡な突き放しで終わるということを考えると、前節の清少納言に通じる才女への対抗意識に加えて、一種独特な異和感が、仮借なき評家としての筆をふるわしめたものと考えられる。

(4) 身近な女房たちの人物評、その長所
——自らを省みる視点として

紫式部日記の寛弘六年（一〇〇九）正月の項で、若宮が参内なさる際、抱き奉る役が宰相の君であるという記述があり、そのあと、内容は一転して、宰相の君以下の身近な女房たち十二人に対する批評を、紫式部は書きつづっている。それらの女房たちに関する記述

の内容を、各女房ごとに名前をあげて、一覧表にしてみた。実に興味ぶかい人物評が出て来た。（p.84—85の図表参照）

前述の(1)から(3)の節で見た三人の女性に対する態度とはまるでちがって、紫式部は、この身近な女房たちについて、その容姿、性行の長所、美点を丹念に記している。そこには彼女らを慈しむほどの親しみすら感じられる。

「顔だち・容姿」の欄だけを見てもわかるように、欠点を示したものはない。「美しい」「上品そう」「賢そう」「清らか」「利口そう」とつづいている。全ての項について、その長所だけを見ようとしている。（式部自身、そのようにことわったうえの記述なのである。）

ただし、空欄が目だつ。「挙措・動作」と「気だて・性質」の欄に多い。これらは最も把握しがたい人間の一面であること。また、とかくこの面ではすぐれることが難しいことなどによるのであろう。反面から言うと、これらの面を敢て記述すれば、各人の欠点の指摘に及ぶので、これを避けたとも思われる。

小少将の君については「顔だち・風貌」も、「髪の様子」さえも書かなかったのは、一覧表のその欄にも記したとおり、式部が最も親しくして、心をゆるして付き合った女房であって、わざと記述をさし控えたと考えられるのである。それとは逆に、小少将の君の「気だて・性質」については、これら十二人の女房の中で、最も多くの字数を費して記述している。それは、式部がこの小少将の君に最も心ひかれていたことの証しであろう。

しかし、小少将の性質は、か弱く、ひっこみ思案で、いかにも保護の手を伸べたくなる人物のように見える。勝気な式部が気を許す人とはこういう人であったのかと驚かされる。小少将としても、聡明で強い性格の式部のような人物を必要としていたのかもしれない。

さらに言えば、小少将の性格には、式部が心ひかれながらも自分自身にはない性質の数々の面が、備わっていたとも考えられ、この交際は式部に多くの自省を促したであろう。（ついでながら、「顔だち・風貌」の欄で、「色白である」「人にすぐれて白い」「大変色白である」と、三人について肌の白いことをあげていること。また、「きまりわるくなるほど上品」などの表現が二人あること、そして、「顔のきめが細か」が二人いることなどから、紫式部の容貌が推定されるように思われてくる。つまり彼女はそれらの逆ではなかっただろうか。紫式部は、あまり色白ではなく、どちらかというと浅黒い方で、肌のきめも荒くはないが細かい方でなく、髪の長さも人並み程度で、おとなしそうな、しかし、他の部分の記述によれば、取っつきにくそうな、十人並みの容貌の女性が彷彿としてくるのである。）

このように、紫式部は周囲の女房たちの美点、長所を丹念に見ることによって、自らの人間として女性としての生き方に、自省を加えることもあったと考えられるのである。

〔身近な女房たち人物評の一覧表〕――「紫式部日記」の消息文による。

女房の名	体つき・体格	顔だち・風貌	髪の様子	挙措・動作	気だて・性質	その他の特徴
大納言の君	たいへん小柄。「いとささやかに」○丸々と太っている。「つぶつぶとこえたる」○外見はすらりとしている。「うはべはそびやかに」	○顔だちは大変に美しい。「顔もいとらうらうしく」○色白でかわいい。	○髪のはえぎわがかわいい。○背丈に三寸あまるほど長い。	○かれんでやさしく上品。なよやか。「もてなしなど、らうたげになよびかなり」		○すべて、こまやかな点までとととのっていてかわいらしい。「すべて似るものなくこまやかにうつくしき」
宣旨の君	○小柄で、しかもすらりとしている。「ささやけ人の、いとほそやかにそびえて」	○こちらがきまりわるくなるほど上品な様子。「いと心はづかしげに、きはもなくあてなるさまし給へり」	○髪が濃くて美しい。○髪が長くて、着物の裾から一尺も余っている。	○物かげから歩み出て見えた有様もあまり立派で、こちらが気をつかうほどである。	○気品のある人とはこのようであろうと、ちょっとした物言いにつけても感じられる。	
宰相の君	○ふっくらとしていて、子供っぽい体つき。	○才気のある賢い顔だち。○美しい。○口もとに、こちらが気おくれするような気品や華やかさがある。		○美しくはなやかなものごし。	○感じの良い性質で、こちらが気おくれするような立派さがある。	○何度も会ううちに立派さがさらにわかっていく人である。
小少将の君	○たいへんかわいらしい容姿。「やうだいいとうつくしげに」			○ものごしが奥ゆかしい。「もてなし心にくく」	○自分から決断することもないほどに遠慮し、ひっこみ思案である。○世間に気をつかう性質。○見るにしのびないほど子供っぽい。「世間なれしていない」○意地悪されると死んでしまいそうにか弱い。	○どということなく上品で、優美である。「そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり」

（紫式部が、もっとも親しくしていた女房）

宮の内侍	式部のおもと（宮の内侍のいもうと）	顔だちの厚で人たち			若い女美しい人	宮木の侍従	五節の弁	小馬
		小大輔	源式部	小兵衛の丞				
○ちょうどほどよい背丈。○座っている姿やかっこうが堂々として、現代ふう。	○ふっくらという程度以上に太っている。○太っている体つきが、大変かわいらしい。	○小柄であるが、現代ふう。「さやかなる人の、やうだいと今めかしきさま」	○ほど良い背丈ですらりとしている。「丈よきほどに、そびやかなる」			○大変小柄で、少女のようにほっそりしている。	○手や腕のかっこうがかわいい。	
○清らかに、初々しい感じ。○中央が高い感じの顔。○肌の色合いが、人にすぐれて白い。	○顔のきめがこまかで、趣深い様子がある。○目もとが美しく笑顔がかわいい。	○利口そうで大変かわいい顔だち。○非のうちどころがない。	○顔のきめがこまやかで、見るほどに美しく、愛らしい。	○大変清らかに美しい。		○可愛く美しい。	○絵にかいたような顔だち。○額が広い。○目尻が大変低い。○別に欠点がない。○大変色白である。	○以前は美しい女房。（今は里にひきこもって出仕しない。）
○髪や額の生えぎわが清らかに美しい。	○大変美しい髪だが長くはないようで、添え髪をしている。○額の生えぎわが美しい。	○美しい髪。もと身長に余るほど長かったが、今は脱けて短くなっている。				○（髪のすその端を切りそろえて、尼になってしまった。）	○初めの頃は背丈に一尺ほど余ってい豊かだったが、今は抜け落ちて、なかなか細くなし、裾は背丈に少しらず、余っている。	○髪が大変長かった。
○風流ぶったり、気どったりする点がない。								
○感じが良い人で少しも気づかわしい点がない。○人の手本に出来そうな人柄。						○自分から好んで年寄りじみ、尼になった。		
○明るく可愛らしい。「はなやかに愛敬づきたる」			○清純で、さっぱりしていて、親が大事にしているような、うぶな感じ。					

〔あとがき〕

本稿は、昭和五十三年一月に、筆者の旧勤務先で一度発表した原稿を、今回、大幅に縮小し、さらに改訂を加えたものである。

不十分なところが多々あり、ご叱正をいただくこともあろうかと思う。

私は決して紫式部の研究者でも何でもなくまったく任意の試みをしたにすぎない。ご教示いただく点があれば幸せである。

参考文献

池田亀鑑　枕草子・紫式部日記　日本古典文学大系　岩波書店
秋山虔　源氏物語一～五　日本古典文学大系　岩波書店
山岸徳平　紫式部　人物叢書　吉川弘文館
今井源衛　紫式部日記・蜻蛉日記　学燈文庫　学燈社
関根慶子　紫式部　岩波新書　岩波書店
清水好子　源氏物語　岩波新書　岩波書店
秋山虔　紫式部日記全注釈(上下)　全注釈シリーズ　角川書店
萩谷朴

（島根県立隠岐高等学校教諭）